

## 京都府教育委員会教育長賞

「わたしのおばあちゃん」

向日市立西ノ岡中学校 3年

伊 東 凜 乃



「ばあば来たよー。」  
声をかけるとにっこり笑ってくれるおばあちゃん。その顔を見るとホッとします。

夏休みに冬休み、長い休みには必ずおばあちゃんに会いに行きます。…でも、本当は会うのが少し辛いです。

なぜなら、公園で私たちと元気に走り回ったり、たくさん笑わせたりしてくれた昔のおばあちゃんではないからです。私のおばあちゃんはアルツハイマー型認知症です。

それは、脳の細胞が少しずつ縮んでいき、物を覚えたり、考えたり、そのうち体を動かすことも難しくなる病気です。

病院で診断されたのは十一年前、六十六歳の時でした。少し前までは一緒に旅行に行ったりもしていたのですが、今では一人で暮らすのが難しくなり、グループホームで暮らしています。

私が小さい頃、母からは

「ばあばは忘れん坊の病気だよ。」

と聞かされていました。そのうち認知症という言葉を知り、おばあちゃんは認知症なんだと思うようになりまし。

旅行に行った時は

「ばあば行くよー。」

と、私はいつもおばあちゃんと手をつないで歩きました。おばあちゃんが不安になったり、迷子にならないようにするためです。ある日、学校で友達と話をしている時に、私が時間を間違えたり、日付を間違えたりしたら、

「認知症やん。」

と笑いながら言われたことがありました。軽いけどその一言が私の胸にグサリと刺さりました。

「冗談で言っただけでほしくなかった…。」  
と思っただけです。

日本では、今、六十五歳以上の七人に一人が認知症と診断され、五年後には五人に一人が認知症になると言われています。認知症は私たちにとっても身近なことで、周りにいる大切な人がいつなってもおかしくない。そう理解しているつもりでも、会いに行くたびに、（どうしたらいいんだろ）と混乱している自分がいます。

本当は、元に戻ってほしい。一緒に遊んでほしいし、家にも泊まりに来てほしい。たくさんおしゃべりして大笑いしたい。でも、それはなかなか難しい。認知症は進行を遅らせることはできません、治すことは難しいから…。

おばあちゃんの近くで暮らす伯母は、病院の先生に

「脳の状態は深刻ですが、お母さんはギリギリまで話したり、歩いたりしてよく頑張っていますよ。」

と言われたそうです。ずっと近くで寄り添ってきただので、その言葉に救われたと話してくれました。そして、「今でもできないことがどんどん増えてきているけれど、このままずっと寄り添っていききたい。」とも言っていました。寄り添うことで学ぶことがたくさんあり、とても感謝していると話してくれました。

私は、おばあちゃんが大好きです。そして、一緒に過ごした楽しい思い出を絶対忘れないし、これからもたくさん会いに行きたいと思っています。いつまでもばあばの笑顔が見たいです。

今、新型コロナウイルスの影響でおばあちゃんに会えない状態が続いています。グループホームでは、家族との面会も厳しく制限されています。さらに、認知症は家族と会えないことで進行が進んでしまうこともあり、すごく不安です。ですが私は命を守るために、今はがまんをするときだと思っています。今できることは、そっと心を寄せること。

認知症は、そばにいる人がいつなってもおかしくありません。そんな時に寄り添う、何もできないかもしれないけれど。そっと寄り添える人が一人でも増えたらいいなと思います。そのために自分ができることをやっていきたいです。